

300種類の商品差別化を実現させた高杉製薬 基礎化学薬品の深掘りに活路を見出す

福岡県に本社を置く化学薬品メーカーの高杉製薬。医薬品、高純度薬品、食品添加物、工業薬品などの幅広い化学薬品を扱い、アイテム数は九州No.1の300種類を超える。100周年を前にグローバル企業としての知名度アップを目指す同社の構想について、代表取締役社長の高杉義明氏に聞いた。

高杉義明

(たかすぎ よしあき)
高杉製薬株式会社
代表取締役社長
1959年福岡県生まれ。
1983年東京大学経済学部
卒業後、三菱銀行(現、三菱
UFJ銀行)入行。1992年高
杉製薬入社。営業部長、常
務取締役、専務取締役を経
て、2000年代表取締役社長
に就任。



九州の老舗化学薬品メーカー

2025年3月で創業から97年目を迎えた高杉製薬は、ニッチな分野で強みを磨き上げた化学薬品メーカーの老舗だ。創業家は先祖を遡れば、福岡県・太宰府の天台宗の僧坊を受け継いで来たが、代々の住職は造り酒屋から養子として送り込まれて来た。明治の世となり、現社長の高祖父である義彦氏が還俗し、その子義祐氏は博多に出て薬品問屋に勤務、その後独立した由である。現在の高杉製薬は義祐氏の次男である義照氏(現社長の祖父)が1929年に創業している。

「私の祖父義照は独立精神旺盛な二男坊で、父親と長兄の薬品事業から、のれん分けもせずに起業したそうです。自前の設備で蒸留水やシロップ、クレゾール石鹼液、アルコール類などを小分けして販売するところからスタートして、戦後の1948年に法人化。バッテリー用の硫酸や染料用の芒硝、写真用炭酸ナトリウムなど、様々な工業薬品の取り扱いを増やしながら戦後の復興需要に応えました。そして1963年に工場を福岡市の隣町の粕屋町に移転し、高度経済成長期には化学メーカー、歯磨きメーカー、電池メーカーなどの

下請けも引き受けながら、事業を拡大してきました」と三代目社長の高杉義明氏は語る。

付加価値向上で成長し 自社ブランドの確立へ

高杉氏は銀行勤務を経て、1992年3月に同社に入社。二代目社長である父・信義氏には、減少していた下請け事業から撤退しながら自社ブランド商品への傾注を提案していった。

社長就任後は、顧客のニーズに対応できる柔軟性も大きな武器とし、自社ブランドをマーケットに浸透させる挑戦を始めた。顧客が要望する品質(純度、不純物低減)、規格、濃度、容量、包装容器、納入数量を供給できるシステム、人材、協力会社を整えた。2000年以降はホームページの充実にも努め、



高杉製薬本社の外観



顧客の幅広いニーズに応える工業用薬品

マーケットの拡大を着々と実現し、直近10年では海外の大口ユーザーも獲得している。

国内で1社、2社のみの製品も

大手化学メーカーが採算性の面から取り扱わないようなニッチな分野にも力をいれた結果、取り扱うアイテム数の多さにおいて、高杉製薬は九州No.1の存在になった。取り扱う薬品の種類は約25種類、アイテム数に至っては300種類を超えた。同社が取り扱う薬品は重量の大きなものが多く、物流コストがマーケットの広さを制約する要因になるが、品目によっては国内で1社、あるいは2社しか取り扱いがないという商品もあり、高品質・高価格という独自のポジショニングを確立していく。

「お客様が要求される容量、純度、濃度などにきめ細やかに対応し、ニーズに合った形で供給するというのが当社のものづくりです。例えば、炭酸ナトリウムを扱う会社はたくさんありますが、商品として差別化が図れないか、



炭酸ナトリウム精製工場、尿素精製工場、硫酸ナトリウム精製工場のほか、多くの薬品加工工場がある



GMP管理のもとに製造された高品質な医薬品

既存分野以外のマーケットに売れないか、海外ではどうか、といったことを考えてきました」

グローバル化が加速する今、国内市場のみならず、海外の潜在的なニーズに応えることで、新たな成長の機会を掴もうとしている。中国・米国・スペイン・韓国などに輸出実績があり、取引先が同社の薬品を使用した製品をインドネシアなどに輸出する事例もある。「ユーザーの要望に応えハラル認証も取得しました。ISOや医薬品のGMP等、規格に基づく審査や査察も受けており、品質管理に加え品質保証にも人手をかけています」

人材育成に関しては、係長以下の社員が毎月1件、年間12件の改善提案を実行し、現在までに9000件以上の改善案件が提案されている。発表や表彰の場も設けることで、組織全体の活性化と社員のモチベーション向上を図っている。さらに大手化学メーカーのOBを顧問として複数採用し、安全対策や環境問題、さらには進化を遂げている営業戦略などを教育できる体制も整えている。

医薬品基準で 品質を武器に成長

大手メーカーが「選択と集中」で事業領域を絞り込んでいるなか、高杉製薬では新工場を建設する計画が進行している。福岡県古賀市に現在と同程度



炭酸ナトリウムや硫酸ナトリウムを始めた高純度精製薬品

の面積の土地を確保し、将来に向けて生産能力を強化していく予定だ。高杉製薬では、医薬品に加えて化学品を多く取り扱っているが、「製薬」という社名にもこだわっている。

「高杉製薬では、ものづくりのなかでも、最も品質管理基準が厳しい医薬品のレベルを標準として、社内の品質管理を行っています。一般的な化学製品の品質管理体制よりも厳しい基準でものづくりをしていますので、高杉製薬という社名に誇りを持っています。一方で、これまでの当社の経営は、まさに石橋をたたいて渡る、慎重かつ着実なものでした。社名が目に残らない、知っている人が少ないという会社では、社員が夢を持ちづらい面もあります。これからは、ウェブサイトはじめブランディングに力をいれて、多くの方に認知される企業を目指していきたいと思います」

高杉氏は、110周年を目前に「現在の売上高45億円から100億円企業へと成長させたい」と語る。

「具体的な数字を示して、社員の気持ちを高め、より一層の努力を傾けることが重要だと思います。当社の強味は、約25種類の基礎的な化学薬品を実に様々な形に加工できることであり、顧客やユーザーのニーズに的確に応えることです。この強味をマーケットに認識していただくことで、大きな目標を達成できると信じています」